

科目	学部	学科	専攻・専修・コース
文化に関する問題	文芸学部	文芸学科	文化専修
受験番号	氏名		採点

下の生成 AI と作曲・翻訳に関する文章は、毎日新聞2024年9月4日朝刊に掲載された「論点 AI と文化芸術」というインタビュー記事からの抜粋である。この文章を読んで下の問いに答えよ。

フィリップ・マヌリ（作曲家）

著作者より二次利用の許諾が得られないため掲載を見合わせております。

福嶋伸洋（翻訳家）

翻訳時に AI を使う手法として、私はポルトガル語の原文を見ながらそのまま自分で日本語に訳して口述し、AI に聞き取らせて文字化する。精度としては6、7割程度。草稿、下訳を作る際にタイピングする負担が減る。私の場合、独自の言い回しが多い書き手を扱うことが多く、特に文芸作品をそのまま AI に訳させることはない。あらゆる書き手に固有な表現を、原

科目	学部	学科	専攻・専修・コース
文化に関する問題	文芸学部	文芸学科	文化専修
受験番号	氏名		採点

文のニュアンスを読み取って翻訳していくのは AI にはまだまだ難しく、人間のほうが強みを持っている。文芸翻訳で AI に仕事を奪われることはしばらくないと感じている。辞書としてアプリや AI を用いることもあるが、特殊な単語や熟語表現は検索しても出てこない。

一方、非常に平易な文章や、日常的、定型的な表現には AI を活用できる。事柄を誤解なく、正確に伝えるタイプの文章に対して AI は非常に優秀だ。文体によっては、文芸作品でも AI に下訳をさせて、自分で日本語の文章に手直ししていく使い方はあり得る。ただ、私はそこまで AI を信用していないし、翻訳という作業で想像力を働かせる楽しみ、醍醐味は自分で味わいたい。AI にはあくまで周辺の仕事をしてもらっている。

SNS（ネット交流サービス）では、私が読めない言語、知らない言語の情報も流れてくる。何が書かれているか、AI 翻訳によって概要を知ることができる。どこにどんな面白いものがあるかを探るには、すごく有効だ。もちろん知らない言語のほうが多いわけで、これらに触れる機会が増えたのはありがたい。

SNS は各国各地域の最新の言語表現、流行の表現が出てきやすい。レコメンド（お薦め）機能によってスマホに流れてくる。新しい文芸作品を訳す際、新しいポルトガル語の言葉遣いを学ぶ場としてはすごくいい。以前、ブラジル・リオデジャネイロのスラムの住人が書き手で主人公の作品を訳したことがあった。口語的でくだけたポルトガル語の表現が多く使われていて、翻訳の助けになった。従来であれば、現地に身を置いたり、こまめに渡航したりしなければ触れることができない先端の言葉に、日本に居ながらにして触れることができる。日常と翻訳がダイレクトにつながっている。

大学の外国語教育には、AI が積極的に導入され、当該の国の言葉で会話に応じてくれる。こちらの発言を注意深く聞き取り、正しい表現も教える。言語学習は日常的にしゃべるのが一番いい。AI が相手であれば、間違ってもいいし、恥ずかしくもない。時を選ばず、安価でもある。実際に人と面と向かう、というプレッシャーもコミュニケーション力を高めるために必要ではあるが、その前の基礎体力をつける場として、これほど有用な機会はないように思う。競争を推奨するわけではないが、学生間でも AI の語学翻訳ツールを知っているか、使いこなしているかどうかで、語学学習の出発点に大いに影響が出ている。

【聞き手・棚部秀行】

